

社会福祉実践における研修の在り方についての一考察

—「人間観」を養う事例研究の必要性—

○ 社会福祉法人白石陽光園 笠松 剛士 (会員番号 008819)

佐藤 岳彦 (特定非営利活動法人ワンファミリー仙台・会員番号 009315)

キーワード：人間観 事例研究 卒後教育

1. 研究目的

社会福祉実践者は、日々の実践を行いながらその実践の質を上げようと様々な研修を受けている。そこで今回は、ソーシャルワークを体系的に行っており、研修会も盛んに行われている「日本社会福祉士会」の「生涯研修」に着目し研修の在り方について考察する。この「生涯研修」には基礎研修Ⅰ～Ⅲがあり、筆者らはこれらを修了している。本研究は実際に参加し、修了したものとしてこの研修を社会福祉実践者がどのように役立てているのかを考察し検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

社会福祉士会で近年行われている生涯研修を、社会福祉士の「価値」、「理論・知識」「実践・技術」¹⁾で分類し、現在行われている研修の傾向を分析する。その後、分析した問題点を検討し、今後どのようにしていけばよりよい研修となるのかを文献を使って考察する。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従い、引用・参考文献等を明記するなどの倫理的配慮を行った。

4. 研究結果

「研修別」「科目別」に分類した結果は、それぞれ右記「表1」及び「表2」の通りであった。

	価値	理論・知識	実践・技術
基礎研修Ⅰ	6.0	2.0	3.0
基礎研修Ⅱ	0.0	52.0	60.0
基礎研修Ⅲ	11.0	40.5	50.5
研修時間計	17.0	94.5	113.5

また、研修テキストの巻頭には、

「基礎課程は、社会福祉士として共通に必

(表1 研修別分類 (単位：時間))

要な価値・知識・技術を学び、社会福祉士の専門性を身につけることを目標としています。」²⁾と述べられ、

	価値	理論・知識	実践・技術
ソーシャルワーク理論系科目	1.5	12.5	18.5
権利擁護・法学系科目	10.5	18.0	15.0
地域開発・政策系科目	0	18.0	24.0
人材育成系科目	5.0	10.0	15.0
実践評価・実践研究系科目	0	27.0	27.0
サービス管理・経営系科目	0	9.0	14.0
6科目の小計	17.0(7.56%)	94.5(42.00%)	113.5(50.44%)

以下到達目標等が記載されていた。

(表2 科目別分類 (単位：時間))

5. 考察

上記の結果から見て研修内容が「価値」について極めて少なく、そして「理論・知識」「技術・実践」に傾倒していることが明らかとなった。これは、「理論・知識」「技術・実践」であると、研修受講側にとっては即効性があり実践に活かすことができるからであろう。しかし、実際にこのようなフレームに括りきれない事例も社会福祉実践者は多く目の当たりにしている。例えば「人を理解する」といった事柄でも、村瀬は「私は「理解」という様式を用いたときだけ理解はできるが、多くの場合私たちは、理解という様式を用いないで、「理解しない」という形で理解していることもある」（傍点筆者）³⁾ という極端ではあるがそんな出口がないような世界がある。事例を一つひとつ丁寧に見つめると、社会福祉実践者自身の既成概念や、「人間観」までもゆらぐことがある。この「人間観」を問う根拠は「《人間》とは何かを考えずに、《人間》をどう捉えるかを問わずして、“社会福祉”を展開することは、その対象の立場から言えば有り得ないし、許されない」⁴⁾ ことにあるからであり、今回の結果から見た「人間観」を包含する「価値」についての希薄さは社会福祉実践者の研修にとって看過できない点である。

塚本は実践者について「過剰なエリート意識をもたないことで、自分も悩み、悲しみ、喜び、怒り、堅固であろうと、いかに努力しても、どうにもならない弱さを持った人間であるということを実感し、反省すること」⁵⁾ し、実践者としての本質的部分を述べている。尾崎は「「ゆらぐ」ことのできる力」⁶⁾ が大切にすることが必要と述べており、この「ゆらぎ」こそが社会福祉実践の質を高めることとしている。これをヒントに、今後の研修を仮説的に試案すると「社会福祉実践者が「ゆらぎ」を感じた事例」をグループワークで検討・研究する研修はどうだろうか。互いに「ゆらぎ」を共有することから始め、そこで感じた「ゆらぎ」から自己の反省点等の気づき、そして振り返りをグループで丁寧に行う。その後、自己省察をきちんと行うこととし、また、グループ内でのいくつもの事例検討をまとめていくうえで抽象化をしていき、事例検討から事例研究まで視野を深めていく。このように、「ゆらぎ」という困惑や困難な状況を赤裸々に打ち明けることで、自己を深く吟味し、自己の絶対化を防ぐことになるだろう。

社会福祉実践者にとって生命線の「人間観」は援助の失敗や、苦悩、迷い等を深く見つめ自己を問う事から涵養されるだろう。そしてこれを見続け、問い続け、逃げないで、立ちつくす実践者こそが真の専門職ではなかろうか。

引用文献

- 1) 秋山智久『社会福祉実践論—方法原理・専門職・価値観—』ミネルヴァ書房、2011、p.210
- 2) 公益社団法人社会福祉士会編『基礎研修テキスト』公益社団法人社会福祉士会、2015の「発刊にあたって」を参考されたい。
- 3) 村瀬学『理解のおくれの本質—子ども論と宇宙論の間で—』大和書房、1983、p.89
- 4) 田中治和「社会福祉学のアポリア」『東北福祉大学研究紀要』、2010、34、p.1
- 5) 塚本哲『心の相談室—カウンセリングと人間性—』誠言書房、1964、p.13
- 6) 尾崎新編『「ゆらぐ」ことのできる力—ゆらぎと社会福祉実践—』誠言書房、1999